

# 学業不振発生予防に関する研究

## 第二報 小児保健的アプローチによる治療法の検討

佐野良五郎

### 1. はじめに

第一報<sup>1)</sup>に於いて、筆者は小学児童に於ける学業不振発生の時期は、従来考えられていた時期よりも早く、小学1年、あるいは小学2年時点より発生することを認めた。しかも、その原因と考えられることは、多くの場合、小児保健的アプローチによってその発生防止が解決されるべき問題であることも認めた。

しかし、一方教育心理学的アプローチとして北尾<sup>2)</sup>らは学業不振の予防対策として、教育行政面や学習指導改善面から種々の対策を述べているが、学校現場では必ずしもそれ等の対策が実施され効果が上がっているとは思われない。元来学業不振の問題は個別的で個性的なものである。そして学業不振を起こした児童一人ひとりにはそれぞれの生育歴や環境歴があり、それを無視することはできない。

その意味で、今回の研究は、児童の健康指導、生活環境の調整の指導及び学習法の指導等、小児保健の拡大指導を実施することによって学業不振を防止する目的で実施した。

### 2. 研究対象児

東京都内に在住し、都内の国公立及び私立小学校に通学する

小学校1年生24名（男児15名、女児9名）

小学校2年生24名（男児15名、女児9名）

### 3. 研究期間

昭和61年4月4日より昭和62年3月31日

### 4. 研究方法

上記対象児を4つのグループに編成した。

- 1) 2年Aグループ12名（男児7名、女児5名）全員を公立小学校在学中の者で編成。
- 2) 2年Bグループ12名（男児6名、女児6名）国立校8名、私立校4名の混合編成。
- 3) 1年Aグループ12名（男児8名、女児4名）国立校3名、私立校5名、公立校4名の混合編成。

表1のa 身体的特徴

調査年月日 年 月 日 児童名 性別 年齢  
 下記の各項目についてあてはまる個所に○印をつけなさい。

調 査 項 目	評 価
<b>I 身体的特徴</b>	a : 2点    b : 1点    c : 0点
<b>A 体力的特徴</b>	いつも    ときどき    しない そうする    そうする
① 学校から帰るとすぐ外に遊びに行く。	a ——— b ——— c
② 静かに読書するよりも、外に出て体を動かす。	a ——— b ——— c
③ 頼まれると、手伝いをする。	a ——— b ——— c
④ 早朝マラソンや自転車乗りに参加する。	a ——— b ——— c
⑤ 学習塾よりも水泳教室やサッカークラブに行きたがる。	a ——— b ——— c
<b>B 食事行動について</b>	
① 料理したものは何でも食べる。	a ——— b ——— c
② 学校給食は残さないで食べる。	a ——— b ——— c
③ 朝食は必ず食べる。	a ——— b ——— c
④ 肉や魚など栄養のあるものを好む。	a ——— b ——— c
⑤ 乳酸飲料や紅茶よりも牛乳を好む。	a ——— b ——— c
<b>C 活発さについて (同年齢の子どもに比べて)</b>	
① 朝、起こさないでもひとりで起きてくる。	a ——— b ——— c
② 大きい声であいさつする。	a ——— b ——— c
③ ひとつの動作から次の動作に移るときに素早く行動する。	a ——— b ——— c
④ 決められた1日の予定はさっさと実行する。	a ——— b ——— c
⑤ 朝起きて登校するまでの支度が早い。	a ——— b ——— c
<b>D 器用さについて (同年齢の子どもに比べて)</b>	よく    やや    できない できる    できる
① オルガン、笛などの楽器を上手に扱える。	a ——— b ——— c
② 図画、工作などの教科が好きで上手にできる。	a ——— b ——— c
③ ノートの書き方とまとめ方が上手にできる。	a ——— b ——— c
④ 鉛筆をナイフで上手に削ることができる。	a ——— b ——— c
⑤ プラモデルを組み立てたり (男の子)、人形づくりや編物など (女の子) をすることが好きで上手に完成させることができる。	a ——— b ——— c
<b>E 動作の敏しょう性について (同年齢の子どもに比べて)</b>	
① ボールを投げたり受けとめたりするのを上手にできる。	a ——— b ——— c
② 機械体操が上手にできる。	a ——— b ——— c
③ 水泳が上手にできる。	a ——— b ——— c
④ 自転車乗りができる。	a ——— b ——— c
⑤ スキップやジャンプが上手にできる。	a ——— b ——— c

表1のb 心理的特徴

児童名		性別	年齢
調 査 項 目		評 価	
Ⅱ 心 理 的 特 徴			
F 言語力について（同年齢の子どもに比べて）		とても	や や ない
① 会話の内容が豊富である。	a ————— b ————— c		
② 形容詞、副詞などの修飾語を上手に使える。	a ————— b ————— c		
③ 会話の中に比喩やたとえなどが使える。	a ————— b ————— c		
④ 単語や熟語をよく知っている。	a ————— b ————— c		
⑤ 話し方がうまく、内容も分かりやすい。	a ————— b ————— c		
G 読書力について（同年齢の子どもに比べて）		とても	や や ない
① 学年や年齢に比較して読書量が多い。	a ————— b ————— c		
② 読書のスピードが早い。	a ————— b ————— c		
③ 外で遊ぶよりも読書を好む。	a ————— b ————— c		
④ どんな種類の本にも興味を持つ。	a ————— b ————— c		
⑤ 学校の図書室や公共図書館（区，市，町立）を利用する。	a ————— b ————— c		
H 計算力について（同年齢の子どもに比べて）		とても	や や ない
① たし算，ひき算，かけ算，わり算の計算が早く正確である。	a ————— b ————— c		
② 暗算が早い。	a ————— b ————— c		
③ 複雑な計算も積極的にやる。	a ————— b ————— c		
④ 九九がすらすら言える。	a ————— b ————— c		
⑤ 数唱が得意である。（例 5 7 8 3 6 1などを暗唱する。）	a ————— b ————— c		
I 作文力について（同年齢の子どもに比べて）		とても	や や ない
① 文章を書くのが好きである。	a ————— b ————— c		
② 日記をつけるのが好きである。	a ————— b ————— c		
③ ノートのまとめ方が上手である。	a ————— b ————— c		
④ 読書感想文が上手に書ける。	a ————— b ————— c		
⑤ 読んだ本のあらすじを上手にまとめることができる。	a ————— b ————— c		
J 連想能力について（同年齢の子どもに比べて）		とても	や や ない
① 本を読むと，すぐその場面をうまく言葉で言える。	a ————— b ————— c		
② 読んだ本の内容を絵に表現できる。	a ————— b ————— c		
③ 絵本を見て話をつくる。	a ————— b ————— c		
④ 言葉のしりとり遊びが早く，的確にやれる。	a ————— b ————— c		
⑤ 与えられた単語や熟語について短文作りができる。	a ————— b ————— c		

表 2

記録年月日 昭和 年 月 日		児 童 名 ( )	
お子さんの気質や行動について下記の項目にあてはまる箇所に○印をつけて下さい。			
(記載例)	活 発 性	<div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> <span>非常に 活 発</span> <span>やや活発</span> <span>どちらとも言えない</span> <span>やや不活発</span> <span>非常に 不活発</span> </div>	
①	活 動 性	<div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> <span>非常に 高 い</span> <span>やや</span> <span>どちらとも言えない</span> <span>やや</span> <span>非常に 低 い</span> </div>	
②	生 活 リ ズ ム (睡眠、食欲、排泄など)	規則的	不規則
③	新しい学課又は課題に対して	積極的	消極的
④	新しい環境への順応性	適 応	不適応
⑤	注意力と集中力 (聞く力、考える力)	長 い	短 い
⑥	反 応 の 強 さ (快・不快場面に於ける情緒反応)	強 い	弱 い
⑦	根 気 と 持 続 力 (作業場面)	長 い	短 い
⑧	気 分 の 質	陽 気	陰 気

4) 1年Bグループ12名(男児7名, 女児5名)国立校4名, 私立校5名, 公立校3名の混合編成とする。

以上の各グループに編成した対象児に対して, 次の項目を実施した。

1. 小児保健的診察

イ) 身長, 体重, 頭囲, 胸囲の測定

ロ) 視診による栄養状態の観察<sup>3)</sup>

ハ) 脊柱, 眼, 耳, 歯, 胸部, 腹部等の一般的診察

ニ) 神経学的所見及び微細な神経学的徴候所見の検査

2. 両親特に母親との面接及び問診。これにより対象児の乳児期より幼児期に至るまでの生育歴の聴取と記録。

3. 表1の身体的特徴の質問紙及び心理的特徴の質問紙を母親に記入させる。

4. Thomas と Chess<sup>4)</sup>による気質的特徴のカテゴリーを参考にして作成した表2の記録用紙を母親に記入させる。

5. 教研式集団知能検査を実施する。

6. 2年生に対しては, 1年生の教研式集団学力検査(算数, 国語)の実施。

以上の項目を実施することによって児童1人ひとりの身体的特徴及び心理的特徴を把握した。次にこれら4グループの児童に対し, 月1回の母子教室を開設し, 母親には下記に述べる小児保健的助言指導を, 児童には集団学習指導を実施した。実施項目は下記の通り

である。

(1) 母親に対する集団助言指導

- a) 日常生活の中で母親のできる子どもの健康チェックについての助言指導（起床、就寝時の顔色、表情、姿勢、発声発言の状況に注目して児童の健康状態をチェックする）
- b) 栄養、睡眠、運動、遊びなどに対する助言指導
- c) 学習習慣をつけさせる助言指導

(i) 学習日記をつけさせる指導

(ii) 心理的特徴や気質を参考にした学習習慣のつけさせ方

(2) 児童に対する集団学習指導

(i) トランプによる数あそび

(ii) ことばによる連想学習

(iii) 四コマ漫画の表現による国語読解学習

(iv) 短文学習

(v) 加法、減法の数式より文章題をつくる学習など

また、児童には集団学習を実施しながら児童の顔色、表情、姿勢、発言発表の状態、学習の集中状態等もチェックした。次に表3の調査用紙を用いて毎月の児童の健康上、生活上、行動上、学習上の変化を母親に記録せしめた。そして、治療開始後6～7か月後に治療効果を確認するために、対象児及び母親に対し、健診と問診を実施すると同時に、1年生及び2年生に教研式集団学力検査（算数、国語）を実施した。

## 5. 研究結果

表1、表2によって身体的、心理的特徴を把握した4グループの対象児と母親に対して、前述した指導法を実施する前と6～7か月後に実施した結果をまとめたのが表4、表5、表6、表7である。

表4は2年Aグループの治療結果をまとめたものである。健康状態のチェックは表3により母親が毎月記録したものをもとにしてまとめたものである。

健康面の効果では、感冒にかかりやすかった症例3、症例5は母親に対する保健指導により感冒にかかる回数が減少した。症例9の気管支喘息児の場合には、発作回数の減少と喘息発作に対する不安感や重症感が母子共に減少するという効果がみられた。症例4に見られた偏食傾向、症例10、症例11の「疲れやすい」、「姿勢がわるい」という問題も、母親に対する養育上の指導により好転するという結果が認められた。

表5は2年Bグループの場合である。症例14の場合には、アレルギー性鼻炎の症状改善は見られなかったが、「疲れやすい」、「元気のなさ」と状態は改善された。症例18のアトピー性皮膚炎と気管支喘息のみられた児童では、喘息発作の回数は減少し、皮膚の掻痒感の軽減が見られた。症例19の偏食のみられた児童、症例23の小食の場合、症例24の感冒にかかりやすい児童の場合には、母親に対する小児保健的助言指導が有効であった。

表6は1年生Aグループについてまとめたものである。症例3、症例4は、感冒にかかりやすい児童であったが保健指導により効果が見られた。症例7は気管支喘息、症例10は顔面にチック症状の見られた児童であったが、母親に対する保健指導により症例3は喘息

表 3. 調 査 用 紙

昭和    年    月    日    【記載者】 父, 母 【児童名】				
下記の項目について1か月間の変化の状態をお知らせ下さい。 各項であてはまるものに○印でかこんで下さい。 (例) 運動する時間      ① 多くなった      □ 先月と同じ    ハ へってきた				
1. 健康状態 (顔色, 元気を中心に)	イ よくなった	□ 同    じ	ハ 悪くなった=病気をした (病名            )	
2. 食欲状態	イ ふえてきた	□ 同    じ	ハ へってきた	
3. 外遊びの時間	イ 多くなった	□ 同    じ	ハ 少なくなった	
4. 活 発 度	イ 高くなった	□ 同    じ	ハ 低くなってきた	
5. 積 極 度	イ 高くなった	□ 同    じ	ハ 低くなってきた	
6. 陽 気 度	イ 高くなった	□ 同    じ	ハ 低くなってきた	
7. 規 則 性 (睡眠時間や食事時間など)	イ 規則正しくなった	□ 同    じ	ハ 不規則になった	
8. テレビを見る時間	イ 少なくなった	□ 同    じ	ハ 多くなった	
9. 読書する時間	イ 少なくなった	□ 同    じ	ハ 多くなった	
10. 作文や日記を書く	イ いやがる	□ 同    じ	ハ いやがらなくなった	
11. 親からの注意	イ 多くなった	□ 同    じ	ハ 少なくなった	
その他先月になかったことや親が気になること。自由に記述して下さい。				

表4 治療効果（2年Aグループ）

		治 療 前				治 療 後		
No.	氏 名	健 康 状 態	知 能 偏差値	算 数 偏差値	国 語 偏差値	健 康 状 態	算 数 偏差値	国 語 偏差値
1	A. T. ♂	血色良好 活発元気あり	52	50	55	健康状態良好	56	58
2	H. H. ♂	活発元気 (+) 血色良好	67	60	65	健康状態良好	62	68
3	H. M. ♂	顔色やや白青い 元気あり。感冒にか かりやすい	63	68	60	顔色は悪いが感冒にか かりにくくなった	68	60
4	A. A. ♂	偏食あり，元気あり 活発 (+) 血色がやや 悪い	58	50	※ 47	偏食がなくなり顔色も よくなってきた	54	50
5	K. H. ♂	扁桃炎を起こし発熱し やすい。顔色悪い(+)	55	52	48	扁桃炎を起こしにくく なった	54	50
6	S. H. ♂	血色良好 元気良好	60	62	58	健康状態良好	62	60
7	O. U. ♂	食欲良好，活発，元 気あり，顔色良好	59	50	51	健康状態良好	52	54
8	S. M. ♀	血色良好 活発元気 (+)	65	68	※ 54	健康状態良好	70	60
9	Y. H. ♀	気管支喘息の発作あり 顔色青白い，疲れやす い	58	60	※ 43	喘息発作の回数減少 顔色血色好転	60	50
10	S. H. ♀	顔色青白い (+) 疲れやすい おとなしい	63	66	56	食欲増進す。顔色の血 色好転す	64	58
11	O. M. ♀	姿勢がわるい やや元気なし 疲れやすい (+)	52	46	※ 42	元気が良 くなっ て き た。疲れやすいの も と れてきた	50	48
12	K. H. ♀	血色良好 食欲良好 活発元気あり	60	51	54	健康状態良好	52	54

(※ 成就値がマイナス10以上)

表5 治療効果 (2年Bグループ)

		治 療 前				治 療 後		
No.	氏 名	健 康 状 態	知 能 偏差値	算 数 偏差値	国 語 偏差値	健 康 状 態	算 数 偏差値	国 語 偏差値
13	S. F. ♂	活発元気 顔色良好	64	68	66	健康状態良好	68	70
14	I. S. ♂	アレルギー性鼻炎(+) 疲れやすい	69	65	62	アレルギー性鼻炎あり	66	64
15	M. K. ♂	血色良好 動作活発	66	61	57	健康状態良好	62	60
16	W. S. ♂	食欲旺盛 元気で活発	63	70	66	健康状態良好	65	66
17	I. K. ♂	顔色良好 活発で元気	72	57※	68	健康状態良好	63	68
18	S. T. ♂	アトピー性皮膚炎時々 気管支喘息の発作あり	53	52	40※	アトピー性皮膚炎あり 喘息発行やや減少	54	46
19	O. U. ♀	偏食あり, しかし元気 良好 やや小柄である	54	44※	51	偏食なくなり体重増加 良好	46	55
20	N. M. ♀	血色良好 食欲旺盛である	60	51	54	健康状態良好	52	56
21	Q. R. ♀	体重, 身長共に大きく 活発で元気良好	75	72	77	健康状態良好	74	77
22	T. M. ♀	顔色良好 活発で元気良好	63	62	58	健康状態良好	62	60
23	T. K. ♀	小食であるが元気は良 好, 疲れやすいところ あり	65	67	60	食欲好転す。疲れやす くなくなった	67	62
24	O. S. ♀	感冒にかかりやすく発 熱を起こしやすい おとなしい	56	52	54	感冒にかかる回数減少 す	54	58

(※ 成就値がマイナス10以上)



表6 治療効果（1年Aグループ）

		治 療 前				治 療 後		
No.	氏 名	健 康 状 態	知 能 偏差値	算 数 偏差値	国 語 偏差値	健 康 状 態	算 数 偏差値	国 語 偏差値
1	U. Y. ♂	血色良好 食欲良好 活発元気	68	—	—	健康状態良好	70	66
2	Y. R. ♂	顔色やや不良 食欲やや不良	56	—	—	食欲好転す。発言多くなり活発になった	52	50
3	S. T. ♂	扁桃炎で発熱しやすい 小食疲れやすい	62	—	—	扁桃炎を起こす回数減少。食欲もやや好転	68	60
4	K. H. ♂	気管支炎を起こしやすい。食欲なく小柄である	58	—	—	咽頭炎程度で、気管支炎を起こす回数減る	54	52
5	N. S. ♂	偏食あり 体重が少ない 疲れやすい	60	—	—	偏食の数が減り食欲もでてきた	64	58
6	C. N. ♂	食欲旺盛 活発で元気	52	—	—	健康状態良好	50	48
7	H. K. ♂	気管支喘息の発作あり 顔色悪い	56	—	—	喘息発作も減り症状がやや軽くなった	58	54
8	S. T. ♂	元気で活発。血色良好で食欲旺盛である	70	—	—	健康状態良好	68	64
9	W. M. ♀	体重、身長共に大きく元気で活発である	69	—	—	健康状態良好	64	60
10	N. A. ♀	神経質、顔面にチックを認める。食欲不振あり	72	—	—	顔面チック減少 食欲もでてきた	74	68
11	N. F. ♀	体格良好。活発で元気、食欲旺盛である	54	—	—	健康状態良好	56	52
12	K. E. ♀	やせ型。食欲不振あり。疲れやすい	56	—	—	食欲不振好転、体重増加も見られた	48	50

表7 治療効果 (1年Bグループ)

		治 療 前			治 療 後			
No.	氏 名	健 康 状 態	知 能 偏差値	算 数 偏差値	国 語 偏差値	健 康 状 態	算 数 偏差値	国 語 偏差値
13	S. K. ♂	体格良好，食欲旺盛 行動活発 血色良好	54	—	—	健康状態良好	56	52
14	S. Y. ♂	体格小がら やや顔色悪し 元気は良好	71	—	—	小柄だが食欲良く，活 発である	80	74
15	Y. H. ♂	血色良好，元気で活発 積極的行動をとる	58	—	—	健康状態良好	65	54
16	A. E. ♂	扁桃炎で発熱すること が多い 食欲不振あり	56	—	—	発熱の回数減少す。食 欲好転す	60	52
17	S. Y. ♂	気管支喘息の発作あり 小食でやせている	52	—	—	喘息発作の回数やや減 り食欲も出てきた	58	50
18	K. A. ♂	アレルギー性鼻炎とア トピー性皮膚炎あり 疲れやすい	64	—	—	皮フの痒みが多少減少 し，疲れやすいのも多 少とれた	68	66
19	H. M. ♂	食欲不振あり 体重が少ない かぜ引きやすい	69	—	—	食欲好転す，体重増加 あり	78	68
20	T. S. ♀	体格良好。活発，積極 性あり	72	—	—	健康状態良好	80	76
21	S. Y. ♀	やや小柄，偏食あり 元気活発	68	—	—	偏食改善す，体重増加 を認める	70	66
22	N. A. ♀	元気，活発であるがや せ型偏食あり 顔色悪い	60	—	—	偏食改善す，顔色は良 くなってきた	58	56
23	Y. F. ♀	行動がのろく疲れやす い。感冒にかかりやす い	54	—	—	食欲好転。感冒にかか る回数が減ってきた	52	54
24	S. Y. ♀	血色良好 食欲良好 活発で元気あり	70	—	—	健康状態良好	78	69

発作の回数が減少し、症例10はチック症状の改善を認めた。症例2は食欲不振、症例5は偏食、症例12は小柄で体重増加の不良な児童であったが、助言指導の効果によってそれぞれの問題の解決が見られた。

表7は1年Bグループについてまとめたものである。症例16、症例23は感冒にかかりやすく発熱しやすい児童であったが、共に保健指導で効果の見られた症例である。症例17は気管支喘息、症例18はアレルギー性鼻炎の見られた児童であるが、指導により以前のような激しい発作がなく、回数も減少したということであった。アレルギー性鼻炎の症例もやや好転の傾向が認められた。症例14、症例19、症例21等はいわゆる児童に見られる微症状としての「小がら」、「やせ」、「食欲不振」等であったが、母親に対する養育上の助言指導で改善傾向の認められた症例であった。

以上の結果で見られたように、健康面の効果は治療教育によって充分になされたものと思われた。

次に心理面の問題として、全対象児に教研式集团的知能検査を実施して知能偏差値が50以下の者を対象児から除外した。それは学校不振児と学習障害児の混同をさけるための手段であった。

教研式集団学力検査は研究開始時期の点より考え、2年生に対しては1年生の算数、国語を実施し、1年生に対しては実施できなかった。

表4に見られるように、治療前に実施した知能偏差値と学力偏差値の結果では、症例4、症例8、症例9、症例11に国語の学力偏差値が知能偏差値より10以上低いことを認めた。一般に成就値（学力偏差値と知能偏差値の差）が10以上の差を認めた時を学業不振と考えられている。その意味でこれらの症例は国語の学業不振と認定した。表5の場合には、症例17、症例19に算数で成就値が10以上の差を認め、症例18では国語の成就値に10以上の差を認めたので学業不振とした。そして、治療後に2年生の教研式集団学力検査を算数及び国語について実施したところ成就値が10未満となり、学業不振傾向が改善された。

1年生の場合には治療後に教研式集団学力検査を算数と国語について実施した。その結果は表6、表7に見られるように、知能偏差値と学力偏差値との差、すなわち成就値が全例に10未満で、学業不振傾向を示す者は1例も見られなかった。この結果からみても、母子に実施した集団助言指導と集団学習指導は学業不振を予防する有効な手段であることを認めた。

## 6. 考 察

筆者は、第一報において学業不振になる時期が小学校2年生時点に多いことを認めた。そのために、学業不振を予防するためには、小学校2年時点か或いは小学1年生時点で予防的処置を実施する必要があると思われた。

その上、筆者は数多くの学業不振児の臨床経験より、小学1年、2年の児童は下記の点において小学3年以上の児童より小児保健的アプローチによる治療の実施しやすいことを認めていた。その項目は次の通りである。

a. 小学1年、2年の児童は身体面、心理面で幼児的特徴が残っている。そのために行動が他律的で、大人への依存度も大きいので、母親の協力があれば集団を形成しやすい。

b. この時期には親からの学習面での圧力が少ないので、母子関係が比較的良好な場合が多い。

c. 基礎学力形成の時期なので、学力の個人差が比較的小さい。

d. 学校生活への興味と好奇心がある時期なので学習習慣が形成しやすい。

以上の理由により、学業不振の予防教育は小学2年以下の児童に実施すべきと考えられる。

今回の研究結果に於いて、母親に対して実施した養育面での保健指導は期待どおりの効果を示した。すなわち、気管支喘息、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎のような慢性の経過をたどる疾患では症状の軽減を認めた。

しかも、感冒にかかりやすい、食欲不振、顔色がわるい等の症状には明白な効果を示していた。また、学習面では月1回の指導という点で効果の上でやや不安の面もあったが、母親の協力によって予想以上の効果を修めた。

2年生の場合には、治療前に実施した学力テストで、症例4、症例8、症例9、症例11、症例18、で国語の語句や漢字面に於ける基礎学力の欠落による学業不振状態が見られたが、母親の協力により治療後には改善が見られた。また症例17、症例19の場合には算数の計算力で不振状態が見られたが、治療後にはその状態が改善されていた。

1年生の場合には、治療後に学力検査を試みたが、学業不振を示した者は一例も認められなかった。以上の点から考察しても学習上の効果をあげるためには、2年生時点で早期に不振状態を発見して予防教育を実施するかあるいは1年生時点より保健指導を実施すると同時に、学習面の指導も実施した方が効果的であることを認めた。

また、今回の対象児の中に、国立小学校、私立小学校の児童を選んだのは、筆者の学業不振児の症例研究の中に数多くの国立又は私立小学校の生徒が多く見られたことと、これらの知能面で問題のなかった児童でも、不適切な扱いによって学業不振状態を示すということが多くの臨床経験で分かったからである。

## 7. 結 語

昭和61年4月4日より昭和62年3月31日までの間に、

2年生Aグループ12名（男児7名、女児5名、公立小学校在学中）

2年生Bグループ12名（男児6名、女児6名、国立校8名、私立校4名の混合編成）

1年生Aグループ12名（男児8名、女児4名、国立校3名、私立校5名、公立校4名の混合編成）

1年生Bグループ12名（男児7名、女児5名、国立校4名、私立校5名、公立校3名の混合編成）

以上の4グループの児童とその母親に対し月1回の保健指導と集団学習指導を実施した結果、健康面、学業面に有効な結果を得た。

本論文の要旨は第34回日本小児保健学会学術集会（高知市）に於いて発表した。

参 考 文 献

- 1) 佐野良五郎「学業不振発生予防に関する研究」(第1報 ～症例の検討～) 白梅学園短期大学紀要, No. 23, 1987.
- 2) 北尾倫彦編著「学業不振の予防教育」1980, 明治図書出版
- 3) 川畑愛義「学童期栄養学」1968, 医歯薬出版
- 4) Thomas, A & Chess, S. : *Temperament and Development*, Brunner/Mazel, New York, 1977.

さの りょうごろう (医学)